

江戸時代の列島各地で、今日藩と呼ばれる封建的な地方支配組織（家中）が成立した。各藩は、将軍によって領地を与えられた大名により経営がなされ、一定の自立した政治・経済・社会的にまとまりをもった行政組織として機能した。こうした江戸時代の各藩の実像については、これまで豊富な文献史料により研究が進められてきたが、近年は城郭や大名屋敷、大名墓の発掘調査が多くなされるようになり、考古学的な知見も集積されてきた。今回は、四国の近世大名5家が造営した墓地に焦点をあて、考古学的な成果を中心に、藩主墓を中心とした近世大名家墓地の様相を明らかにすることを試みたい。各藩は具体的にどのような墓地を築いたのか、それはいつからでどのような変遷があったのか、墓地造営の目的等について明らかにし、近世大名墓がもつ、政治的・経済的・文化的な特質について考えてみたいと思います。

## 1. はじめに

### ○大名とは

古くは多くの名田を持った者をさしたが、鎌倉時代にはすでに有力な武士をあらわす言葉となり、…江戸幕府成立以後…元和元年（1615）の『武家諸法度（ぶけしよはつと）』においては大名小名といい、その中で国大名という言葉も用いているが、寛永十二年（1635）の諸法度では国主（こくしゅ）・城主（じょうしゅ）・一万石以上といい、一般に万石以上という言葉が大名全体をさすようになった（児玉 1987）。

### ○大名の区分

三家…家康の子の義直（よしなお）・頼宣（よりのぶ）・頼房（よりふさ）を祖とする名古屋（尾張）・和歌山（紀伊）・水戸（常陸）の三徳川氏

家門（かもん）…将軍の子弟の創立した家や三家の分家

三卿（さんきょう）…八代将軍吉宗の子の宗武（むねたけ）・宗尹（むねただ）、九代家重の子の重好（しげよし）を祖とする田安・一橋・清水の三家

譜代（ふだい）…はじめから徳川氏に臣属（しんぞく）していたものであるが、関ヶ原の戦後に取り立てられた者も多い。

外様（とざま）…織田信長や豊臣秀吉時代にすでに大名として独立していて、関ヶ原の戦後に徳川氏に服属（ふくぞく）したもの。

### ○大名家の格式

官位…以下の7つの官位が与えられた。減封処分等により上下の移動はあり、固定したものではない。

従二位権大納言…名古屋・和歌山の両徳川

従三位権中納言…水戸徳川

正四位下参議…金沢前田家

正四位近衛中将…近江彦根の井伊家、福井の松平家、会津の松平家、薩摩鹿児島島の島津家、陸奥仙台の伊達家等

正四位下～従四位下近衛少将・侍従…上記以外の大大名や老中

従五位下国守・式部少輔・左京太夫・大炊頭等…その他大名

無官

江戸城登城時の詰所

大廊下上部屋…三家

大廊下下部屋…三家の嫡子（ちゃくし）・家門・金沢前田家

溜間…家門の一部・譜代大名（会津松平家・讃岐高松松平家・彦根井伊家等）

大広間…三家の庶流、国持大名・四位以上の外様大名

帝鑑間…家門の一部・譜代大名

柳間…外様大名の十万石未満の家

雁間…譜代大名で、五万石から十五万石ぐらいの家が多い

菊間…三万石未満の大名

## ○墓の種類

墓には、遺体を埋めた本来の埋葬墓のほかに、髪爪や分骨といった遺体の一部、遺品等を埋めた墓、死者を供養、慰霊（いれい）するためだけに造立された供養塔（くようとう）等がある。大名墓の場合、複数の墓がある場合が多く、どれが埋葬墓であるかは、埋葬施設を発掘調査しなければ、特定することは困難であるが、当時の文書記録に埋葬が詳細に記録されているものについては埋葬墓に含める。また、明確に髪爪等を埋めた墓や供養塔についても、ここでは供養塔として墓に含める。

埋葬墓や供養塔に造立された石塔には、五輪塔（ごりんとう）や宝篋印塔（ほうきょういんとう）、無繒塔（むほうとう）、笠塔婆（かさとうば）等の多くの種類があり、地域や時代により、同じ石塔でも、形状の差異は著しい。以下では、近世大名墓の仏式石塔を「墓標（ぼひょう）」と呼ぶ。また、同じ墓標でも研究者により呼称が異なる場合があるが、ここでは対象とする四国の大名墓の墓標に限定して、図1に示した『近世大名墓所要覧』（坂詰2010）に示された分類名称を用いる。なお、儒葬墓での墓前に立てる墓石については、「墓碑（ぼひ）」という呼称を用いる（吾妻2021）

## ○菩提寺と墓所

菩提寺（ぼだいじ）とは、藩主家の位牌（いはい）が安置され、藩主家一族や家臣が参詣（さんけい）して、先祖代々の菩提（ぼだい）を弔（とむら）う法要等が営まれる寺院。藩からの扶持米（ふちまい）の支給や寺領の寄進によってその経営がなされ、一般に藩内での寺格が高い寺院が多い（例えば、高松法然寺（ほうねんじ）の高300石、阿波興源寺（こうげんじ）の同550石、土佐真如寺（しんにょじ）の同110石等）。また、位置は、居城からの参詣の便を考慮して、居城周辺に置かれている場合が多い。大名家墓所は、菩提寺内に造営されるのが基本であるが、例えば高松松平家日内山（ひうちやま）墓所や蜂須賀家万年山（まんねんやま）墓所等の儒葬墓（じゅそうぼ）では、居城や菩提寺から離れた場所に造営されている。

## ○儒教

中国において前漢の武帝が…、儒家の教説を基礎に正統教学として国教化し、以後、清末まで王朝支配の体制教学となった思想。孔子を開祖として戦国期の孟子（もうし）・荀子（じゅんし）など原始儒家によって思想形成を遂げた。…儒教では三綱五倫（さんこうごりん、君臣・父子・夫婦と兄弟・盟友）の三ないし五組の身分的、血縁的關係をあるべき人倫秩序とするため…この人間関係を支えるのに必要な道徳として五常一仁・義・礼・智・信が唱えられ…綱常思想が定着した。…日本には…五世紀ごろ伝来…。…近世に入ると…将軍や大名など、高い地位にある為政者の教養として、広く重んぜられるようになった…また一面では、武士をはじめ一般の人々のための日常的な道徳の教えとして普及した。しかし…その社会に対する影響力には、…かなりの限界があった。…その反面、幕府や諸藩では、儒教にそれほど重要な意義を認めてはいなかったから、民間での学者たちの活動の内容には、ほとんど干渉しようとしなかった。…武士や庶民など、さまざまな身分から学者が輩出し…それらの学者が開いた私塾などによる教育活動…により、…儒教の思想は、いわば通俗化された形態で、広く民衆の間にまで普及した。…幕府や諸藩では、十八世紀後半から、武士に対する教育に関心に向け、藩校や昌平坂学問所を設立したので、武士の間には、朱子学を中心とした儒学が広く普及するようになった。（尾藤正英 1986「儒教」『国史大辞典』第7巻、吉川弘文館）

## 2. 四国の大名

### ○讃岐国

文禄4年(1595) 生駒親正(ちかまさ)が讃岐国12.6万石(後、高直しにより表高17.1万石)を与えられ高松・丸亀に築城(後、高松を居城)。

寛永16年(1639) 生駒騒動により改易(かいえき)、藩主高俊(たかとし)は出羽国由利郡矢島藩に1万石で転封(てんぷう)。讃岐国は幕府直轄(ちよっかつ)領となる。

寛永18年(1641)、山崎家治(いえはる)が肥後国天草富岡藩より丸亀5.3万石に加増転封し、初代丸亀藩主となる。

寛永19年(1642)、水戸初代頼房(よりふさ)の第1子頼重(よりしげ)が、常陸国下館より高松12万石に加増転封し、高松松平家初代藩主となる。以後、松平氏が高松藩を幕末まで統治。

慶安4年(1651) 山崎家3代治頼(はるより)が8歳で死去し、山崎丸亀藩は無嗣断絶(むしだんぜつ)により改易。

万治元年(1660) 播磨龍野藩主京極高和(たかかず)が丸亀藩6万石へ転封し、京極氏丸亀藩成立。以後、京極氏丸亀藩を幕末まで統治。

### ○阿波国

天正14年(1586) 蜂須賀家政(はちすかいえまさ)が阿波国18万石を与えられ、一宮城、後に徳島城を築城し居城とする。

慶長5年(1600) 家政の長男至鎮(よししげ)が家督(かどく)を継ぎ、初代阿波藩主となる。以後、蜂須賀氏が阿波国を幕末まで統治。

慶長20年(1615) 大坂の陣での功等により、松平姓を将軍家より下賜(かし)、淡路国を加増され、25.7万石の四国最大の外様大名となる。

### ○土佐国

慶長5年(1600) 関ヶ原後、西軍に与した長宗我部盛親(ちょうそかべもりちか)が改易され、遠江掛川城主山内一豊(やまうちかずとよ)が土佐一国20.2万石を与えられ、浦戸城、後に高知城を居城とし、土佐藩初代藩主となる。

### ○伊予国

慶長 20 年 (1615) 仙台藩伊達政宗 (まさむね) の庶長子秀宗 (ひでむね) が宇和島藩 10 万石を与えられ、宇和島城を居城として入部、伊達氏宇和島藩が成立。秀宗は将軍秀忠 (ひでただ) より特別に、国主格の扱いを受ける。

元和 3 年 (1617) 伯耆国米子藩主加藤貞泰 (さだやす) が伊予郡大洲 6 万石に移封。大洲城を居城とし、加藤氏大洲藩初代藩主となる。

元和 9 年 (1623) 加藤貞泰の長男泰興 (やすおき) が大洲藩を相続し、2 代藩主となる。その際、内分分知として弟直泰 (なおやす) が領内 1 万石を分知相続し、支藩として新谷藩が成立。以後、加藤氏が幕末まで大洲・新谷藩を統治する。

寛永 12 年 (1635) 定勝系久松松平家 2 代松平定行 (さだゆき) が、伊勢桑名藩より松山藩 15 万石に加増転封。松山城を居城とする。以後松平氏が幕末まで松山藩を統治。同年、定行の弟松平定房 (さだふさ) が、伊勢長島城より今治藩 3 万石 (後、4 万 → 3.5 万石に加増) に加増転封。今治城を居城とする。以後松平氏が幕末まで今治藩を統治。

寛永 13 年 (1636) 一柳直頼 (ひとつやなぎなおより) が、父直盛 (なおもり) の遺領のうち、周布郡内 1 万石を相続し、新屋敷村に小松陣屋を置き、伊予小松藩初代藩主となる。一柳氏は伊予河野氏の一族とされる。以後一柳氏が小松藩を幕末まで統治。

明暦 3 年 (1657) 宇和島藩 2 代宗利 (むねとし) の異母弟宗純 (むねずみ) が、初代宗利分知状により領内に 3 万石を分知され、吉田藩初代藩主となる。以後、宇和島藩・吉田藩は伊達家が幕末まで統治する。

寛文 10 年 (1670) 紀州徳川家初代徳川頼宣の三男松平頼純 (よりずみ) が西条藩 3 万石で入封。紀州家の支藩として西条陣屋を構える。以後、御連枝松平家が西条藩を幕末まで統治する。

### 3. 四国の大名家墓所

#### ○讃岐高松藩松平家

国許に、仏生山来迎院法然寺般若台 (初・3～8 代) と霊芝寺 (れいしじ) (日内山) 墓所 (2・9 代) があり、東京に伝通院 (10 代) と谷中霊園 (11 代) がある。10 代頼胤 (よりたね) 以降 2 代の藩主とその家族の墓が東京に造営されたのは、逝去 (せいきょ) が明治時代で、明治四年 (1871) の廃藩置県により、旧藩主家が東京居住を強制されたことによる。なお、11 代頼聰 (よりとし) と 12 代頼壽 (よりなが・藩主ではない) は谷中霊園に墓所があったが、平成 26 年度に法然寺に改葬された。

#### 法然寺墓所

初代藩主頼重により、寛文 8 年 (1668) 起工、寛文 10 年 (1670) 完成。讃岐に配流されていた法然が滞在中庵を結んでいた生福寺を、仏生山に移し再興した。墓所は「般若台」と呼ばれ、総面積約 3,960 m<sup>2</sup> (墓域平坦地面の面積で、門・石垣等は一部除く) を測る。

高松城のほぼ南、直線距離で約 8.6 km の位置に所在。法然寺の最大の特徴は、頼重が自ら構想した浄土世界観が地上に再現されている点 (古野 2015) と、北には讃岐を東西に横断する南海道と、西には隣国阿波へ通じる塩江街道が交差する陸上交通の要衝 (ようしょう) の地にあり、寺の周囲には池や堀を配置し、また丘陵頂の般若台の周囲を石垣で囲い、さらに高松城下より直線道 (仏生山街道) を整備し、街道沿いに門前町と多数の寺院を配置するなど、高松城からの兵の移動と駐屯 (ちゅうとん) 機能を備えた軍事的な機能を併せ持つ (胡 2011)。また、墓所の北東鬼門の位置に設計された本堂域には、浄土宗を中心に天台・真言・仏心の「結集 12 人」を中心とする「道心者」により諸堂での宗教活動が継続され、「宗派を超えたところに松平家を位置付け」、さらに寺が所蔵する霊宝類の領民への拝観を許可し、藩主一族墓がある般若台の丘陵斜面は領民等の墓所として開放され、「領民の上に立ち慈悲をもたらす存在として」、藩主一族を位置付けたものとされる (御厨 2013)。こうした点は、庶民に受け入れやすい浄土信仰を基本と

し、その背後に儒教的な思想を読み取ることができよう。

また、墓域の一角には鎮守社を設置し、初代頼重墓以下、藩主墓には霊廟（れいびょう）の正面に拝殿（はいでん）が建てられていたことが、発掘調査で確実となり（香川県立ミュージアム 2015）、神道（しんとう）への配慮も伺える。拝殿を伴う霊廟は、四国の他の大名家墓所では未確認（今後調査が進めば、類例が確認される可能性は残る）であり、また、享保五年（1720）の将軍吉宗が将軍家墓所での御霊屋（みたまや）建立を禁じて以降、各藩の大名家では吉宗に倣い霊廟建築を取りやめるが、松平家墓所では幕末の現高松市西山崎町に所在する本堯寺（ほんぎょうじ）に葬られた松平頼該（よしかね・慶應四年（1868）没）墓にまで霊廟建築が継続しており、松平家墓所の格の高さと独自性を表現するものとも考えられる。また頼重墓の直上に建てられた廟堂である般若堂には、理平焼（りへいやき）で焼成された御束帯（そくたい）姿の頼重陶像が、墓標の代わりに不動明王や愛染明王、地藏菩薩、毘沙門天と共に安置され、そこには「密教的な要素を含む特殊な組み合わせ」がみられる（御厨 2013）と共に、明治期に胸像が高松城天守台に造営された玉藻廟（たまもびょう）へと移されたことから、神像としての扱いがなされていたと考えられる。この点は、拝殿を伴う建築遺構とも相関し、頼重が自らを藩祖として神格化しようとした可能性が伺える。

般若台には、中央に法然供養塔を設置し、藩主家一族を中心とした約 180 基（松平家に関係のないと思われる墓標を含めると 202 基）もの墓標が確認され（香川県立ミュージアム 2015）、大名家墓所での墓標造立数は国内でも有数の規模を誇る。その反面、燈籠（とうろう）や花瓶、手水鉢等の家臣団から寄進される石造物は皆無に等しい。埋葬に特化した独特の墓地景観も特徴の一つと言える。一族墓の墓標の最大の特徴は、独特の「無繕塔形を選択し、それが藩主から一族の末端にまで」共有される点にある（古野 2015）。無繕塔の選択は、また、同世代墓では藩主墓→正室墓（初代・二代正室を除く）→藩主生母や有力一族等の順に、墓標や基壇の規模や有無、霊廟の有無といった格差が認められ、最下層の他の一族墓では、「性差や地位、時代との相関関係が単純には認められ」ず、墓所に近接して葬られた重臣墓より小規模な一族墓も存在し、「生前の地位等多くの要因」により墓の構造が影響されたとされる（古野 2015）。同時に、藩主墓を除く一族墓には、築造位置に明確な規則性は認められず、あたかも先代の墓標の隙間を埋めるかのように造墓が繰り返され、「個別の人間関係は視覚的面では混沌として」いる（乗岡 2018）。さらに、藩主墓と正室墓は必ず東向きに造立されているが、側室墓や子女墓の中には、西や南、南西、北東等地形や周辺墓との関係から向きが設定されたと考えられる墓標も多い。こうした点も、階層性を反映したものとみなせる。なお、初代藩主の男子竹松墓の五輪塔、初代藩主の男子頼芳（よりよし）の生母芳院の宝塔（ほうとう）形、二代藩主の男子永之助墓や、八代藩主の男子頼顕（よりあき）の男子富之助墓の位牌形のように、少数無繕塔以外の墓標が造立されているが、その要因は現状では不詳である。ただし大多数の墓標が無繕塔を選択していることは事実であり、こうした同形態の墓標を一族や重臣間で共有することで、明瞭な同世代藩主を頂点とした階層関係の視覚的表示機能を担い、またその紐帯の強化が図られたものと考えられる。無繕塔の採用は、藩主墓では延宝八年（1680）没の 3 代頼豊（よりとよ）が最初であるが、没年を基準とすれば寛文八年（1668）没の初代藩主の女子、長の生母の常照院や同年没の初代藩主の生母久昌院の母養心院等が先行する。検討の余地は残るが、藩主墓に採用される前に、松平家の墓標として無繕塔は決定されていた可能性は高い。しかし、まもなく頼豊墓で無繕塔が採用されて以後、藩主墓は頼豊墓を基準に、それを超えない規模でほぼ同規格に画一化されて、繰り返し造立されている。そこには、後述する他の大名家にも通じた、前例踏襲的な意思により、個々の藩主の在位期間の長短や治績の優劣、出自の上下は反映されない、個人よりも「家」が優占された、「家」の権威表現の場であったことを読み取ることができよう。藩主やその一族の死や法会を通じて、一族や親類縁者の大名家、重臣の一部に、それを視覚的に反復して確認するための装置として機能したと考えられる。

初代と 3 代頼豊墓では、藩主墓と正室墓は別々に造営され、またその規模の格差も大きい。しかし 4 代頼恒（よりたけ）以降、6 代頼真（よしまさ）を除く 8 代頼儀（よりのり）までの 4 人の藩主墓は、基本的に基壇を別にするが正室墓と並んだ夫婦墓で、墓標等の格差は初・3 代と比

して、著しく縮小している。4代墓の造営には5代頼恭が関与しており、後述するように頼恭の出自は、水戸徳川家の連枝守山松平家であり、父祖は水戸家一族として瑞龍山に埋葬されている。儒墓を導入することはなかったが、水戸家藩主墓と同様な夫婦墓については、頼恭の意図が反映されている可能性も考えられる。

般若台に築造された墓標の正面には、被葬者の戒名と没年月日が陰刻されている。例えば3代頼豊墓では、「高林院殿真蓮社廓譽了然源恵大居士 尊儀」と戒名が中央の枠内に、その正面向かって右に没年、左に没月日がそれぞれ刻まれている。戒名は、院殿号+蓮社号(れんしゃごう)+譽号(よごう)+道号(どうごう)+諡号(しごう)(戒名)+位号+置き字の順となっており、浄土宗最高位の戒名で、菩提寺の浄願寺や法然寺の僧侶により授けられたようだ。以後藩主は同格(置き字を除いて十六字)、正室は蓮社号を欠く、一族墓では院殿号の代わりに院号を用いる、蓮社号や譽号、道号、置き字の内一部や全てを欠く等、おそらくは上記した上部埋葬施設の構造と関連した階層差が認められる。また、藩主の諡号は「源」を通字として用い、これは後述する日内山墓所の藩主の墓碑銘にも認められる。徳川家の出自を反映したものであろう。

般若台に埋葬された藩主家一族墓で、埋葬施設が調査された例はない。したがって、埋葬の詳細については不明である。文献史料には、いくつか埋葬時の詳細が残されている。それによると、法然寺に葬儀の行列が到着すると十王堂前で「鎖龕(さがん)之作法」が執り行われ(「龕」は棺のこと、「鎖」は「とぎす・とじる」と訓じて、龕(棺)を閉ざすこと)、仁王門前まで進み、仁王門前の広庭と称される場所に棺が置かれ、引導、焼香がなされた。その後、新たに法然寺が作成した位牌の焼香、開眼があり、続いて藩主名代が焼香し、以下参列者が続く。仁王門前の法事については、即就院(頼儀母・文政十二年(1829)没)の葬儀時の図が残されており、それによると、棺は仮小屋を設け、幕を張った中に、東西の向きで安置され、つまり般若台、来迎院の方を向いて行われた。法然寺僧の葬儀への関与はどうやらここまでで、般若台の中に入るのは大老・家老の四名、奉行、寺社奉行及び儒臣らであったようだ。納棺、副葬品については、頼恭の事例が記録(「穆公遺事」)されており、頼豊・頼桓は「諸事仏道の御納り」であったが、頼恭の時には、「文公家礼」に従った「儒道の御納棺」が行われたとされ、儒臣を中心に納棺が行われ、銅板に刻した誌文が埋められた(香川県立ミュージアム 2015)。この点は、平成26年度に11代藩主頼聰とその正室墓の谷中霊園からの改葬時に計6基の松平家一族の墓の調査が行われた際にも、実際に再確認されている。頼聰墓では、地下に長方形の石室を築き、石室内床面に薄く炭を敷いた後厚さ1~2cmの板材を棺台とし、その上に石灰を厚さ5cm程度塗り、その上に外棺と内棺の二重の木棺を置き、それぞれの隙間に炭化物や石灰が詰められ、内棺内に遺体が埋葬されていた。棺の形状から北枕に伸展葬で埋葬されたと判断されている。また、明確な副葬品は出土していないが、銅板製の墓誌(ぼし)とそれを収納した石製墓誌櫃(ひつ)各1点(櫃は銅線により結束されていた)と、墓石内より一字一石経が出土している(古野・御厨・加藤 2016)。墓誌等の正確な出土位置についての記載はないが、他の墓の例や写真記録より、石室蓋石上面から出土したと思われる。明治期には墓誌は金属製となり、石製櫃に納めて遺体よりも浅い位置に埋納された。こうした本墓での埋葬様式は、『家礼』の「治葬」に倣(なら)い埋葬されたもので、仏教式の墓標と一字一石経の出土からは、一つの墓のなかに共存する「宗教の複数性」が示されている(松原 2012・2019)。文献史料の考古学的な調査から、松平家における儒葬の導入は、明和八年(1771)の頼恭以降、明治期に至るまで継続していたと考えられる。これまで既述した点をまとめると、松平家墓所は仏寺境内に営まれた仏葬から儒葬へ転換された。それが、頼恭の代になされた点は、後述するように興味深い。

## 日内山墓所

高松城から南東へ約14.5km離れた、現さぬき市造田乙井に所在する霊芝寺の裏山の中腹(標高約53m)の丘陵南斜面部に、二代頼常(よりつね)墓と九代頼怒(よりひろ)墓の2基のみが造営されている。いずれも儒墓で、大名家墓所では香川県内唯一の事例となる。2基の墓所は、墓道奥(西)に2代墓、手前(東)に9代墓がほぼ同規模、同方向を向いて並んで築かれている。儒墓とは、中国南宋の朱熹(しゅき 1130~1200年)が著わした『家礼』に倣った墓制である。

江戸時代には徳川家康が林羅山（らざん）を登用して以降、朱子学がやがて官学として重用されるにつれ、幕府政治にも深く関与するようになり、羅山は寛永十二年（1635）には「武家諸法度」を起草するなど、幕府初期の諸制度を整備し、後に林家は教学の責任者として大学頭（だいがくのかみ）を世襲する。「朱子学の冠婚葬祭の四礼のうち、後世とりわけ重視されたのが「喪礼」と「祭礼」に二礼で」あり、…このうち「喪礼」は葬儀と服喪の二つを含んでおり、その記述をふまえて葬儀がとり行われ、儒墓が造られた（吾妻 2020）。

墓所は、周囲を石垣に囲まれた上下2段の平坦面からなり、墓道に連続した石段を上ると前庭部（下段平坦面）となる。前庭部は、柵により2分され、奥側の柵内側は拝所部となり、石畳の形状の違いや「日内山御廟所御平日御参詣之図」（以下、「日内山之図」とする）に描かれた矩形（くけい）の表現から、拝殿（はいでん）が建てられていたことが想定される。拝殿を抜けてさらに石段を登ると埋葬空間（上段平坦面）となり、前面に尖頭板状の墓碑が基石上に立てられ、奥に径4mの円形の封があり、裾は配石により囲まれる。しかし、「日内山之図」には封を妻入り屋根形で描かれ、これは水戸徳川家藩主墓の馬鬣封（ばりょうふう）を表現したもので、本来は円墳ではなく馬鬣封であったとされる（香川県立ミュージアム 2015）。

さて、2代墓と9代墓のみが法然寺ではなく、霊芝寺裏山に築かれたのかは、両者がいずれも本家水戸家に出自を持つ養子であったことが重要である。水戸家では、初代頼房以下歴代の藩主・正室と一族墓が、居城より約22.4km北東に離れた瑞龍山（ずいりゅうざん）に儒葬墓で埋葬されており、頼常はこうした水戸家の墓制により埋葬されることを頼豊に遺命しており、それを頼豊が忠実に執り行ったことによる（古野 2015）。居城より離れた丘陵南斜面を墓所とする点、石垣基壇上に築かれた儒葬墓である点、碑身の細部は異なるが円頭型（吾妻 2021）である点は水戸家墓所と共通するが、水戸家藩主墓では藩主と正室が並んで埋葬された夫婦墓の形式が執られており、また拝殿が建てられた痕跡も認められない。なお、水戸藩主墓の墓碑は、下から台石・亀趺（きふ）・碑身で構成されているが、日内山墓所では亀趺ではなく方趺（ほうふ）である。水戸家では、亀趺は藩主と正室のみに許されており、それ以外の一族墓は方趺であり、水戸家の葬制のルールに従ったと考えられる（中国宋代の礼制（喪葬礼）では、官位五品以上が亀趺上に墓碑を建て、七品以上は方趺上に碣を建てるとされている（吾妻 2020）。つまり、方趺より亀趺が上位に位置する。）。また、一族墓はいずれも単葬であり、婚姻者でも夫婦墓ではない。その点も、水戸家一族墓の墓制に忠実であったことがわかる。馬鬣封のみが、水戸家墓制にみられる格差表示から逸脱しており、本来は水戸家の世子であった頼常のメンツを尊重したものであった可能性が考えられる。馬鬣封は『礼記』に記された特殊な墳土であり、円墳が伝統的な形であった（吾妻 2020）ことから、頼常の馬鬣封へのこだわりが読み取れる。なお、水戸家墓所に現存する長屋門、御装束所、御宝蔵、番所といった施設は日内山墓所にはなく、霊芝寺には別棟として「御成りの間」が現存し、頼豊から最終的に寺領100石の寄付がなされ、墓所の維持や管理を担っていた。しかし、儒墓であることから位牌にあたる神主は霊芝寺には安置されず、菩提寺とはならなかった。また、居城から東に離れた丘陵部が選ばれた理由には、初代頼重が造営した法然寺への遠慮や水戸により近い場所であったからかもしれないが、これは想像だけで確たる根拠はない。『家礼』では「山水の形勢」を選び、「土色の光潤、草木の茂盛」なる場所に営むとする（巻四・喪礼・治葬）。中国や朝鮮ではおおむね、そのような山林の形勝の地に造られ」（吾妻 2020）、水戸家や日内山墓所はこうした『家礼』に倣った墓所の選地がなされたことは確実であろう。

一方で、既述したように、水戸徳川家の連枝守山松平家2万石に出自を有する5代頼恭（よしたか）は、父祖が水戸本家と同じ瑞龍山に儒葬で埋葬されているにもかかわらず、法然寺墓所に埋葬された。しかし、その埋葬にあたっては既述したように「儒道の納棺」が行われた（溝渕 2014・松原 2015）。この点は、本家と分家という出自の格差、同じ分家でも高松松平家との家格の違いが、頼恭の日内山への儒葬が選択されなかった要因となった可能性が高いと考える。

松平家墓所では、仏式儒葬による法然寺墓所と、儒式儒葬による日内山墓所という葬制の異なる2ヶ所の墓所が国許にあり、その成立は法然寺の1660年代にある。また、両者は、法然寺墓所が水戸家の連枝ながら高松藩を創立した頼重によるものであり、日内山墓所はその養子となっ

た水戸家世子による造営である。出自と立場の相違が、本家との葬制の差異を生じさせている点で興味深い。法然寺墓所における、密集した墓標の造立と一族を通じた同一規格による墓標の選択は、法然寺墓所における特徴の一つであり、より詳細な分析を行うことにより、より細かな画期や各墓の造立背景にまで踏み込んだ議論が可能となろう。一方で、同形態や様々な規格の中に個人が埋没し、個々の個性は表現されない。それが漫然と約 200 年間にわたり繰り返されてきた集積としての典型的な墓所構造であり、そこに近世社会の特質と限界を読み取ることが可能なかもしれない。

## ○讃岐丸亀藩京極家

藩主墓は、領国飛び地の現滋賀県米原市清滝の徳源院（初代～5代）と国許現丸亀市府中の玄要寺（6代）、現東京都麻布の光林寺（7代）の3ヶ所に墓所がある。徳源院（とくげんいん）墓所は、総面積約 1,200 m<sup>2</sup>と小規模。大名墓は国許か江戸に造営されるのが一般的で、京極氏のように国許等以外に墓所を造営した大名は数少ない。現状では、島原藩深溝松平家が、本貫地である三河深溝の本光寺例が知られているのみとされる（中井 2010）。

### 徳源院墓所

2代高豊（たかとよ）は、初代高和（たかかず・元和五年（1619）～寛文二年（1662））の墓所を造営するに際し、京極家初代佐々木氏信（うじのぶ・承久2年（1220）～永仁3年（1295））の菩提寺であった清滝寺（せいりゅうじ）を再興し、京極家墓所とした。墓所は、清滝寺を初代高和の院号より天台宗霊通山徳源院（とくげんいん）と改称し、伽藍背後の西側の丘陵斜面を上下2段のテラス面に造成して、周囲を門と築地塀で囲み墓域とした。上段テラス面には、氏信以下周辺に散在していた歴代の墓標（12代、14代欠）と頼氏（よりうじ・初代氏信の長男）と経氏（つねうじ・氏信三男満信の三男宗氏の男）の墓標計 18 基を補修・配列し、下段に、京極氏中興の祖である 19 代高次（たかつぐ・若狭小浜藩初代）の笏谷石製霊屋と北にやや離れて高和と祖父の出雲松江藩初代忠高（ただたか）の墓標を造立し、埋葬した。墓標は高次墓のみ砂岩製で、忠高と高和墓は花崗岩製のいずれも宝篋印塔である（中井 2010）。上段墓所に安置された鎌倉時代以降の祖先墓も全て宝篋印塔であり、墓標の選択は祖先墓との紐帯を表示したものと考えられよう。

徳源院墓所には、丸亀藩初代以下5代高中（たかなか）までと、高次の次男高政（たかまさ・高和の父）、丸亀藩3代高或（たかもち）の三男高綏（たかやす）の長男高迢（たかとお・4代高矩（たかのり）の養子）、6代高朗（たかあきら）の長男高美（たかよし）が埋葬されている。高政・高迢・高美の3人は早世した世子（せいし）で、高次石廟の南に石塔が建てられている。そのほか、丸亀藩京極家の分家である多度津藩京極家初代～5代の供養塔が、世子墓群に対面する位置に造立されている。つまり、京極家のみの墓所空間となっており、正室や側室、世子以外の子女墓等を伴わない点は法然寺墓所とは異なり、それは国許以外に墓所を造営したことが大きな要因と考えられる。

墓所造営時に埋葬された丸亀藩初代高中墓を含め、それ以前に亡くなった先祖墓（高次石製霊屋について、松原氏は「廟の造営時期は…高野山の石造六角宝塔と同じ時期に整備され」、その「万治元年は高次没後 49 年に当たる。50 回忌に合わせた整備の可能性」を指摘し、供養塔の可能性を指摘する（松原 2015）。）及び多度津藩主の供養塔（寛政年間（1789～1801 年）に江戸幕府が編纂した『寛政重修諸家譜（かんせいちょうしゅうしょかふ）』によると、多度津藩初代は江戸の光林寺に葬られ、2代高慶（たかよし）と3代高文（たかふみ）は丸亀の玄要寺（げんようじ）に葬られたことが記されている。玄要寺には多度津藩歴代墓が所在しており、徳源院の藩主墓は供養塔である可能性は高い（中井 2010）。）には霊屋はないが、丸亀藩2～5代墓には、一重、宝形造、向拝一間、本瓦葺きの霊屋（たまや）が造営されている。また、丸亀藩主墓の宝篋印塔は総高 250～280 cm、多度津藩主墓のそれは 184～194 cmであり、規模に明確な差が認められる。丸亀藩主墓が埋葬墓の可能性が高く（地下調査が実施されていないため不明だが、他に墓所

を設けていないことや、6代高朗の遺髪や誌什遺稿を埋めた讃骸塚が墓所南端に所在することから、歴代藩主が埋葬された可能性が高い（中井 2010）。）、多度津藩主墓は供養塔であることを含め、両者の間には明確な階層差を認めることができる。なお、丸亀藩6代高朗は国許の玄要寺に埋葬されているが、埋葬が明治時代に下ることが要因としてよい。

墓碑銘は、初代高和は没年月日「寛永二年」「九月十三日」とのみ正面に彫られ、2代高豊墓は正面中央に「徳源院殿傑山道英大居士」の戒名を挟んで、右に没年「元禄七甲戌歳」、左に没月日「五月十八日」を刻し、背面に「源朝臣京極高豊」と諱が刻まれている。以後この碑銘の形式が5代まで踏襲される。初代墓の戒名を彫らない碑銘のあり方は、中世墓のそれを踏襲しており、戒名は別に墨書で記されていた可能性も考えられる。2代の戒名は、院殿号+道号+法号（諡号）+位号（計11字）と簡潔であったが、3代高或は「天祥院殿前若州大守仁嚴道宅大居士」と院殿号と道号の間に「前若州大守」と官位を挿入して、文字数を16字に増やしており、4・5代も同じ様式である。天台宗には、先に高松松平家でみた譽号や蓮社号はなく、11字より文字数を増やせないことから、官位を挿入して戒名を長くした。おそらくは多度津藩主墓との格差を表示したものと考えられる。なお、法号（諡号）に「道」字を通字とする。

丸亀藩京極家墓所の特徴は、国許ではなく京極氏本貫の地である近江国蒲生郡に墓所を造営したことで、祖先墓とみられる墓標をおそらく可能な限り同一墓域に補修・集積したこと、その地に葬られたのが丸亀藩主とその世子墓に限られる点にある。墓標に祖先墓と同じ宝篋印塔を採用し、墓標の連続性により「家」の歴史の古さを視覚的に表現し、墓標による立体化された略系図を意図した可能性も考えられる。また、既述した讃岐高松藩法然寺墓所と同様に、霊屋を文化八年（1811）死没の5代高中まで造営しており、「家」に埋没した藩主のあり方がここにも読み取ることができる。

## ○阿波藩蜂須賀家

藩主墓は、徳島城のほぼ真北約900mにある興源寺墓所（初代～6代・9代）と、京都清浄華院（7代）、徳島城の南西約2.4kmの独立丘陵眉山（標高約290m）の北麓になる万年山墓所（8代・10代～14代）の3ヶ所がある。藩主は基本的に国許に埋葬されているが、7代宗英（むねてる）のみが京都に墓所を有する。宗英の娘の友姫が京都の公家東園家（ひがしそのけ）に嫁いでおり、東園家は清浄華院（せいじょうかいん）を墓所としており、その縁で京都に埋葬されたとされる。興源寺にも墓標はあるが、遺髪等を埋めた供養塔とされる。

## 興源寺墓所

墓所は、臨済宗妙心寺派大雄山興源寺（こうげんじ）の西側に、四周を築地塀で囲い、北側に濠をめぐらして造営された。墓所の総面積は約12,000㎡と広大で、塀を隔てた南には中老長坂家等の重臣墓や側室とみられる墓標があり、その点で高松松平家法然寺墓所の景観に近い。興源寺は、藩祖家政（いえまさ）の異母兄で臨済僧であった東嶽禅師（とうがく）を開山とする、蜂須賀家の菩提寺であった江岸山福聚寺を城内から現在地に移し、寛永十三年（1636）に寺号を2代忠英（ただてる）の院号から興源寺に改め、墓所を造営した（徳島市教育委員会 2005）。おそらくこの時点で、元和六年（1620）に死没していた初代忠英も墓所内に改葬されたと考えられる。墓所の造営は忠英によってなされたが、おそらくは忠英後見であった家政の意向もあったと思われる。家政が寛永十五年（1639）に没すると、興源寺墓所の中央に葬られ、その南から西、北へと歴代墓が追葬された。

蜂須賀家は、7代藩主宗英の時に後継ぎがなく（6代宗員（むねかず）の次男重矩（しげのり）がいたが、幼少のため継げなかった）、最初伊勢桑名藩主松平忠雄（ただまさ）の次男宗純（むねずみ）を養子とするが、元文四年（1739）に早世し、同年高松松平家の一門松平大膳家2代宗鎮（むねしげ）を迎えて8代藩主とした。宗鎮の後継として、当初宗員を養子としたが

早世、次いで5代綱矩（つなのり）の三男隆寿（たかよし）の次男重隆（しげたか）を養子とするが病弱により廃嫡、宗鎮の実弟至央（よしひさ）が養子となり、宝暦四年（1654）に9代藩主となるも、同年死去し、興源寺墓所に埋葬された。至央は興源寺墓所に埋葬された最後の藩主となる。次いで、久保田藩支藩秋田新田（あきたしんでん）藩佐竹義道（よしみち）の四男重喜（しげよし）を末期養子として、10代を継がせた。なお、既述したように、宗英は京都清浄華院に埋葬され、興源寺墓所には供養塔が造立され、宗鎮は10代重吉が造営した万年山墓所に埋葬された。以後、基本的に万年山墓所に埋葬墓、興源寺墓所に供養塔が造立された。

以上をまとめると、本墓所には藩祖家政と初代～6代・9代が埋葬され、10代～13代斉裕（なりひろ・慶應四年（1868）没）までの藩主墓は供養塔である。さらに5代綱矩二男で世子の吉武（よしたけ）、宗員二男で世子の充矩（てるのり）は埋葬墓と、11代治昭（はるあき）までは、家政二女万（まん・慶長十七年（1612）没）の供養塔を除けば、藩主と世子のみが墓を造立したが、12代斉昌（なりまさ）の代に再室考（こう・天保八年（1837）没）、13代斉裕の長女賀代（かよ・慶應元年（1865）没）のそれぞれ埋葬墓が造立され、藩主夫人や子女に開放された。おそらくは後述する万年山墓所に一族墓が形成され、藩主墓の同一墓域に夫人や子女を埋葬することに抵抗感が低減したことが要因とも考えられるが、なぜ考と賀代のみが本墓所内に埋葬されたかはこれからの検討課題としたい。

藩祖家政と初代至鎮の墓標は碑形で、ほぼ同形同大の花崗岩製（乗岡氏は初期のものではない可能性を指摘する（乗岡 2018）が、同意見である。）。2代墓は無繕塔となり、高さ4.24mと日本有数の大きさを誇る（徳島市教育委員会 2005）、3代光隆（みつたか・寛文六年（1666）没）墓から五輪塔となり、10代重喜墓からはさらに碑形（円頭型）へと変更される。以後碑形が幕末まで採用される。墓標基壇は、家政・至鎮が方形、忠英から凸形となり9代至央まで継続する。10代重喜以降は長方形となる。墓基壇は、2代から7代宗英までが一辺約18mの方形、8代宗鎮・9代至央は一辺約15mの方形へと縮小し、10代重喜以降はさらに縮小して一辺約14mの方形の前面に長さ3mの前庭部が付す凸形となる。10代以降の規模の縮小化は、後述する万年山墓所の墓基壇高は約85cmで、墓道より石段が付設される。石段と墓標基壇までは石畳となり、墓標基壇が凸形となる2代～9代墓ではさらに石段があり、基壇凸形部へ接続する。10代墓以降は、凸形の張り出し部が石畳に取り込まれ、墓標基壇前面に拝石が設置される。発掘調査がなされていないため、墓標を覆う霊屋や拝殿、基壇周囲の玉垣の形状や有無については不明。拝殿については、上述した石畳や墓基壇の形状より当初よりなかった可能性が高い。墓基壇の規模は大きく、霊屋が建てられていた可能性は高いと思われる。また、地下の埋葬施設についても未調査のため不詳であるが、6代宗員は火葬にされたことが史料より判明しており、仏式にて埋葬されたことは確実である。

## 万年山墓所

万年山墓所は、徳島城西に聳える独立丘陵眉山の北麓に10代重喜により造営された墓所で、総面積は史跡指定地範囲で約180,000㎡と広大である。山麓には現在でも「御墓山」と刻された境界石が現存し、領民の墓域内への立ち入りは制限されていたと考えられる。墓域内には13箇所の平坦地が造成され、斜面部には高石垣が積まれ、さながら山城のような景観を呈する。また、墓域の最高所には墓所造営時の明和三年（1766）に製作された、緑色片岩の露岩の表面を平滑に削り、そこに「阿淡二州太守族葬墓域」と題した石碑がある。碑文の内容は、「10代藩主重喜が、この墓域を万年山と命名し、その範囲を数値で示し、子孫のために新しく造成した儒葬の地で、自分の意思を後世まで伝える」ことを記す（徳島市教育委員会 2005）。

本墓所に最初に埋葬されたのは、10代重喜の長女簾（みす・明和三年（1766）没）で、本墓所の完成とほぼ同時期に儒墓として埋葬された。したがって本墓所は、子女を含む一族墓として当初より計画され、儒墓により埋葬されることが予定されていた。重喜の出自佐竹家は代々仏式により葬儀がなされており、重喜による儒墓の導入は、既述した松平家でみた出自によるものではなく、儒教に傾倒した藩主の個人的な意向が蜂須賀家のそれまでの葬制を大きく変化させたものであった。その背景には、蜂須賀家とは血縁関係にない出自であったことと、それ

までの興源寺墓地にも供養塔の造立を継続したことが、当時存命であった8代藩主宗鎮を含めた蜂須賀家一族や家臣団に、儒葬が許容された背景として考えられる。以後、万年山には、藩政期のものに限れば、藩主5体、夫人1体、側室11体、藩主の未婚の子女17体、11代治昭の子昭順（あきのぶ）の未婚の子女4体、早世した世子重隆と重隆の三等親13体及び被葬者不明1体が儒葬により埋葬された（徳島市教育委員会2005）。重喜以降は、平坦面（報告書では台地とされる）毎に藩主とその正・側室や子女が埋葬され、世代単位の家族墓の様相を呈している。さらに、藩主墓を頂点に、区画や墓碑、封の規模、藩主墓との位置関係でストレートに階層差や血縁関係が表現されており、極めて秩序的な墓地景観を実現している。

8代墓碑は花崗岩製の円頭型、基壇は方趺で、碑身高約2.1m、基壇高約0.6m、封は円墳（盗掘？により変形顕著）で径約4mと推定される。墓碑の上端には二重の縁に沿って内側に施された線刻（暈（うん））があり、下に「故阿淡二州太守源僖恵公之墓」を刻まれている。また、調査の結果、薄い盛土下に封や墓碑基壇の周囲には瓦埴（煉瓦）が敷き詰められていた。墓碑の碑身の大きさは『家礼』の規格を大きく逸脱するものの、墓碑銘や瓦埴を敷き詰める点等は、『家礼』式墓碑に合致する。

重喜系の藩主は、重喜孫の12代斉昌（なりまさ）で絶え、斉昌の養子として第11代將軍家斉（いえなり）の二十二男斉裕を13代藩主に迎えたが、斉裕も儒葬により万年山に埋葬されている。幕末期の動乱期に就任した若き藩主には、佐幕と攘夷の両論が藩内にあり、藩論を統一することさえできず、ましてや葬制を変更する力や時間は与えられていなかったであろう。

蜂須賀家の墓所の大きな特徴は、蜂須賀家に出自を有さない藩主重喜により、葬制の大きな変更がなされた点にある。画一的で保守性の強い各大家墓所にあつて、儒墓の導入に成功し、一族墓として墓域を新たに造営した点は、一代限りの高松松平家での有りようとは比べると、その変革の大きさがよくわかり興味深い。

## ○土佐山内家

### 筆山墓所

山内家墓所は、居城の東南約2kmに所在する筆山（標高約117m）北麓の斜面部に造営されている。藩主墓域内の山麓には、山内家の菩提寺である真如寺があり、かつては真如寺より藩主墓へ至る参道が伸びていたとされる（高知県2015）。筆山北麓には、大きく2ヶ所に分かれて東に、藩主と藩主子女、一族、分家、家臣の墓域が、西に分家と側室、家臣の墓域がそれぞれ分布する（これら江戸時代を主体に形成された墓群の総称として筆山墓所と呼び、藩主墓周辺を山内家墓所と呼称したい。以下では、山内家墓所を中心に説明する。）。藩主墓域は、基本的には藩主のみが埋葬され、幕末・文久2年（1862）の制度改革により、嫡子や妻子の帰国が認められた後、土佐で死去した夫人以外は江戸で死去して江戸の菩提寺に埋葬された。しかし、3代忠豊（ただとよ）の正室長光院が延宝三年（1675）に死去した際、遺命により忠義墓の西に並んで埋葬されているのは、特殊な例である。子女墓では6代豊隆（とよたか）二男久米千代（正徳四年（1714）没）以降、6代3人、8代2人、9代1人、10代2人、12代6人が埋葬され、次第に家族墓の様相を呈するようになったようだ（ただし、文書史料では、初代一豊（かずとよ）の廟所付近に一豊の妹慈仙院の墓があったことが記されており、現在は墓域内に慈仙院の墓はなく、おそらく3代忠豊の墓所造成時に別の場所に移されたと思われる。）。

山内家墓所に最初に埋葬されたのは初代一豊（かずとよ）で、慶長十年（1605）に死去し、火葬の後筆山に葬られた。当初の墓の場所は不詳だが、寛永八年（1631）に一豊の墓が不審火で炎上する事件があり、文献の記載から山道付近にあつて、霊屋に納められていた可能性が考えられる。2代忠豊は寛文四年（1664）に死去し、一豊の墓の東に埋葬された。この場所は「日讚寺之上」と記され、当時筆山の山中にあつた龍乗院の上方に位置する（上述した火災の後、一豊の墓が移されたのかは不明。）。3代忠豊は寛文九年（1669）に死去し、生前一豊の廟所の側へ葬ることを遺命した。そこで一豊の廟所の位置が問題となった。一豊の廟所が2代忠義に廟所より低い

位置にあり、しかも往還に近い場所として相応しくないとされた。4代豊昌は一豊と忠義の廟所を改葬し、忠豊の廟所を造営するよう命じ、現在の廟所の配置となったとされる。つまり、山内家墓所としての設計プランは、豊昌により作られた（高知県 2015）。なお、現在の一豊の墓標の表面には、火災の痕跡が認められないため、火災の直後かこの改葬時に墓標が新調された可能性が考えられる。その後6代豊隆、8代豊敷（とよのぶ）、13代豊熙（とよてる）の埋葬時に墓域が拡張されているが、先代の廟所の移動は行われていない。

山内家では、明治五年（1872）に東京で死去した15代豊信（とよしげ・号容堂）を除き、上述したように16代の歴代藩主はすべて国許の筆山に埋葬されている。これは江戸で死去した場合でも、江戸の菩提寺青松寺（現東京都港区）には埋葬せず「帰葬（きそう）」を行い、土佐まで遺体を運んだことによる（高知県 2015）。江戸から土佐まで20日余りを要したようで、夏場だと遺体の腐敗が避けられなかったと思われる。土佐山内家に限らず、西国の外様大名を中心に、帰葬を行った大名は数多くいた。既述した高松松平家、阿波蜂須賀家、後述する宇和島伊達家も基本的に国許に埋葬されており、丸亀京極家も国許ではないが帰葬としてよいだろう。「関ヶ原合戦の戦功によって移封された新地の領国であっても、徳川家康より拝領した領国であり、土地に強い意識」があったとされる（中井 2013）。確かにそれもあったと思われるが、参勤交代で江戸城へ登城すれば、他の大名との家格や官位により、廊下ですれ違う際の立ち居振る舞いまで厳格な決まりがあり、屋敷地においても自由に外出することはできず、国許に居る間が心休まる時間であったことを思えば、死してまで江戸には居たくはないと思うのも要因ではないかとも思われる。

また、山内家の藩主墓の特徴の一つに、儒教の葬制にある「昭穆（しょうぼく）」を採用していた点がある。上述したように、4代豊昌により採用され、藩祖である初代一豊の墓標を最奥部に置き、奇数代を西に、偶数代を東に分けて、廟所を配置するものであった。7代豊常（とよつね）が享保十年（1725）に死去した際には、廟所を設ける土地が不足したため、6代豊隆の西隣に埋葬し、以後「昭穆」は採用されなくなったとされる。こうした儒教の葬制には、『家礼』に示された「誌石」の埋納も、山内家の各藩主墓においてなされたとされる。また、4代・7代・9代・11代の各藩主には、砂岩製の亀趺碑が立てられている。

初代一豊は茶毘に付されたことから、仏式により埋葬されたことは確実である。しかし2代忠義以降は、死後土葬を行い、その後菩提寺で初七日の法事を行った。また忠義の棺は、内側から杉、檜、樺（けやき）、楠、石という五重の構造で、棺の間に松脂や蠟（ろう）を詰めていたとされる。こうした多重の棺に松脂や蠟を用いる手法は、既述した高松松平家の谷中霊園での埋葬施設の構造と共通し、儒葬により埋葬されたことは確実である。9代豊雍（とよちか）の埋葬時には、より詳細に埋葬の手順が記録されている。まず、納棺前の墓穴際を真如寺の僧らが三回廻り、棺の前で勤行を行い、真如寺以外の僧はここで退出する。その後、棺を楠の棺へ納め、真如寺が野位牌を棺の上に置き、木鍬で土を掛ける所作を行い、退出する。埋葬に僧が関与するのはここまでで、その後棺は石室内に北枕で納棺され、石室内には松脂や三物（「炭化物や石灰、酒を混ぜた土」（松原詰められていた。穴生方（あのうがた）が石槨の蓋を覆い、普請方が石槨の上に土を二尺入れて埋め、棒で「千本突（搗）」を行って土を固め、棺の上に誌石を置き、再び土を二尺入れて「千本突（搗）」を行い、続けて廟地を均す（高知県 2015）。仏僧の関与は、石室への納棺前の位牌の作成と勤行、埋葬終了後の初七日の法事以降であり、ここでは儒家の姿は見えないが、埋葬施設の構造や誌石の作成は儒家によってなされたと考えられ、より具体的に大名葬制における「宗教の複数性」が読み取れ興味深い。なお、墓所が丘陵斜面部に造営されている点にも、既述したように儒教の影響が伺える。

墓碑は、初代一豊と2代忠義は花崗岩製の無繕塔、3代忠豊からは砂岩製の笠塔婆に変更され、以後幕末までの藩主墓・夫人墓・子女墓は全て同タイプの笠塔婆を用い、規模や基壇石材の彫刻の有無により格差を表示する。花崗岩は、高知県内でも産する（例えば、足摺岬の閃長岩が著名。）が、おそらくは瀬戸内系の石材が使用されたと思われる。砂岩は普遍的に産する石材で、高知県内でも容易に入手が可能である。花崗岩から砂岩への変更は、高価な他国産石材よりも、領内の石材を用い、加工の容易な板状の墓標へ変更することで、葬儀に伴う出費を節約することを意図

したものと考えられる。ただし墓標前面に供献される燈籠各1ないし2基は、花崗岩製である。

藩主墓の墓標に刻された戒名は、初代一豊は中央に「大通院殿前土州太守四品心峰宗傳大居士」を刻し、向かって右に「慶長十乙巳年」、左に「九月二十日」と没年月日を刻む。戒名は院殿号+官位+道号+諡号+位号の順となる。2代忠義は、中央に「竹岩院殿前土州太守従四位下侍従龍山雲公大居士」、右に「寛文四甲辰年」、左に「十一月廿四日 藤原朝臣忠義壽七十有三而終」、背面に「孝子藤原朝臣忠豊謹造立之」として、戒名は同じだが、氏姓諱と享年、背面の造立者名が追加（2・3代墓のみ）される。これが基本となり、幕末まで踏襲される。なお、4代・7代・9代・11代の各藩主には、砂岩製の亀趺碑が立てられている。なお、幕末に描かれたとされる「真如寺御廟所画図面」によると、各廟所の入り口には「唐御門」や「御門」が設けられ、周囲は生垣や瓦塀、目隠し塀で囲われていたようである（高知県2015）。なお、藩主墓の墓標基壇の四隅には●印が描かれているが、門や塀の記載から柱を表現したものと考えられる。墓標基壇の●印は、藩主と藩主夫人に限られ、子女墓には描かれていない。以上の点から、おそらく藩主及び夫人墓には1間四方の霊屋が建てられていた可能性が考えられる。

## ○宇和島伊達家

宇和島藩伊達家の墓所は、国許に居城の南東約900mの辰野川北岸の河岸段丘上に所在する龍華山等覺寺と、南東約1.1kmの辰野川南岸の段丘上に所在する金剛山大隆寺の2ヶ所に所在する。いずれも臨濟宗妙心寺派の寺院で、等覺寺は初代秀宗が母の菩提を弔うため元和4年(1608)に建立した。大隆寺は伊達家の前に宇和島藩主であった富田信高が父知信の菩提を弔うために慶長十三年(1608)建立し、伊達家入封後は、5代村侯が自らの菩提寺に定めた。

## 等覺寺墓所

墓所は寺の本堂の東と西に分かれて所在。現在は両墓所に間に墓地があり、多数の墓標が造立されているが、少数の近世にまで遡る可能性がある墓標を除くと、いずれも現代墓である。西墓所の付近に、一族の桑折宗臣の墓標がある。西墓所の総面積は約1,600㎡、東墓所は総面積約2,260㎡である。

墓所としては、初代秀宗が生母の菩提を弔うため元和四年(1618)に開山し、その後父政宗の供養塔も追造された、両供養塔は西墓所に所在する。当墓所が本格的に大名家墓所として整備されていくのは、万治元年(1658)に初代宗利の廟所が西墓所に造営されて後であり、寺号も等覺寺と改められた(西澤2015)。秀宗の墓標は総高約3.6mの花崗岩製の五輪塔で、地輪の向かって右端に、「前遠州太守拾遺」「等覺寺殿 義山信公大居士」と刻され、地隣左端に没年月日が刻されている。戒名は、寺殿号+官位+道号+諡号+位号の18字、基本的にこれまで見てきた外様大名4家の戒名と大差はない。その後2代五輪塔が、宝永五年(1708)に東墓所に造立されるが、その総高は約1.5mと顕著に小型化する。これは墓標上位に霊屋が建てられたため、石材も砂岩製に変えられる。初代墓には拝所は設けられていたようだが霊屋はなく、霊屋建築による総工費を節約するため、墓標の小型化と石材の変更がなされたと考えられる。伊達家本家では、豪華な霊屋が藩主墓や夫人墓に造立されており、それに倣ったものと考えられ、墓地を東墓所に設けたのは、初代墓との格差を視認するところが避けられたためであろう。その後霊屋は、東墓所に3代宗贇(むねよし)、西墓所に4代村年(むらとし・享保二十年(1735)没)まで建てられた。5代村侯(むらとき)は後述する大隆寺に墓所を移動するが、6代村壽(むらなが・天保七年(1836)没)は再び東墓所へ夫婦墓で葬られる。7代以降の藩主は、死没が明治期に下り、墓標は笠塔婆形(笠付碑形)に変わる。子女墓は、西墓所に19基、東墓所に12基が残されている。しかし、東墓所に2・5代の子女が葬られる等、家族とのセット関係に乏しく、子女墓の位置の決定根拠については不詳である。

## 大隆寺墓所

墓所は、初代藩主正室墓が墓所入り口付近に造立され、その脇から南東に直線状の長い参道が

伸び、参道奥に手前から7代宗紀（むねただ）・正室の夫婦墓、初代二男宗時（むねとき）墓（世子）と二代夫人墓、9代宗徳（むねえ）墓と脇の区画に9代生母墓、最奥に5代村侯（むらとき）・正室の夫婦墓が尾根稜線上に並んで築造されている。周辺の一族墓等を含め、大隆寺墓所の総面積は約2,200㎡である。5代村侯墓において、大隆寺墓所の藩主墓の新設、霊屋の廃止、夫婦墓の採用、墓標規格の初代宗利墓への復帰がなされている。5代村侯墓において霊屋の廃止が決定されたことについて、西澤氏は『鶴鳴餘韻』に「華美を廃する」とあることを取り上げて、「享保五年（1720）の將軍吉宗の御霊屋建立禁止と共通しており、これもまた「治世の風俗」で「時勢になら」ったものとも解釈できる」とする（西澤2015）。一方、乗岡氏は「村侯は先行する藩主とちがって先代伊達家からの自立を進めた改革者で、財政再建だけでなく前例踏襲を打破するといった気概も作用していたに違いない」とする。なお、夫婦墓の採用については、村侯の正室護姫は佐賀藩5代鍋島宗茂（むねしげ）の娘で、鍋島藩主家では夫婦墓を採用しており、それに倣った可能性も考えられる。

宇和島藩伊達家墓所では、国許の居城近くに等覺寺と大隆寺という2ヶ所の墓所を有する点、当初は藩主単独墓であったが、5代村侯より夫婦墓となり、それが明治期まで継続される点（ただし5代正室墓は遺髪を埋めた供養塔である。）、家臣が献じた燈籠が計237基に上り、これは讃岐、阿波、土佐の各大家ではみられない数である点、2～4代墓のみ霊屋で覆われ、阿波蜂須賀家墓のように霊屋の有無が不明な墓所はあるものの、霊屋が幕末まで継続しない点で、讃岐や土佐の墓所とは異なる特徴として挙げられる。

## 4. さいごに

### 墓所の造営時期

墓所の造営時期は、高松松平家法然寺墓所が1668～1670年、丸亀藩京極家徳源院墓所が1662年頃、阿波藩蜂須賀家墓所が1636～1639年、土佐山内家が1669年（再整備期）、宇和島伊達家が1658年である。若干の時間差があるのは、藩の成立時期の差が反映されていると思われる。高松松平家や丸亀京極家、宇和島伊達家等の各家の墓所が整備される1660年代前後は、「將軍家綱の治世」となり、「幕府や各藩も軍事的・政治的・社会的・制度的な安定期に入り、武断政治から文治政治に移行した。幕府による大名改易もひと段落し、各藩は新田開発や治水工事、交通路の整備、城下町経済の拡充など領国経営を進展させた。戦乱に明け暮れた時代を知る世代が相次いで死去して家ごとに世代交代が進み、戦功を初めとする個人の業績が個別に評価される時代は終わりを告げ、武士は「家」に応じた格と職を「世襲」し官僚化していった。…まちまちに個性をもって臨機応変の場所にある個人の墓から、定まった場所に歴代墓が集う「家」の墓所の形成は必然であった」とする（乗岡2018）。一方で、中世段階でも例えば現栃木県足利市の樺崎寺や現横浜市金沢の称名寺には、それぞれ足利氏や北条氏の墓所が造営されている（板橋2012・松井2012）。そうした中世の一族墓とは、連続するのかわかると非なるものなのか、私の勉強不足のため今回は触れることができない。また、近世には天皇家も現京都市東山の泉涌寺（せんにゅうじ）に歴代天皇や皇后、皇子の墓が営まれ、公家の鷹司家も現京都市右京の二尊院に家族墓的な墓所を造営する（藤井1989）。武家層以外の上位階層との比較も、今後の先行研究を参照しながら、勉強をすすめていきたい。

### 墓標

藩主墓の墓標は、高松松平家は無繕塔形、丸亀京極家は宝篋印塔形、阿波蜂須賀家は碑形（楕形・後補の可能性？）→無繕塔形→五輪塔形→碑形（楕形）と変遷、土佐山内家は無繕塔形→笠塔婆と変遷、伊予伊達家は五輪塔形を採用し、各家、時代により多様性が認められる。高松松平家や初期の蜂須賀家や山内家で無繕塔形が採用されるのは、それが中世に禅宗を中心とした僧侶の墓標として用いられ、晩年出家した藩主の墓標として適していたことも要因と考えられる。蜂

須賀家では後に、五輪塔を採用したが、それは藩祖家政の墓標が五輪塔であったことが要因とも考えられる。さらに10代重喜以降は碑形（楯形）へと変更されるが、それは10代が既述したように儒墓に葬られていることが大きく影響している。儒墓の墓碑に形態的に近似した墓標が選択されたと考えられるが、表面に刻まれた墓標名は、仏式の戒名である点は、供養塔ではあっても仏式による祭礼がなされていたことを反映しているのかもしれない。

## 菩提寺

菩提寺は、高松松平家法然寺は初代頼重が再興したもの、多度津京極家の徳源寺は、2代高豊が初代高和の葬儀に際し、祖先の佐々木氏信の菩提寺であった清瀧寺を再興したもの、阿波蜂須賀家の興源寺は、藩祖家政の異墓兄で臨済僧であった東嶽禅師を開山とする江岸山福聚寺を現地に移したもの、土佐山内家の真如寺は、初代一豊が遠江国掛川から土佐へ入部した際、随伴した曹洞宗の僧在川が慶長六年（1601）に掛川の寺基を潮江山山麓に移して、日輪山真乗寺とし、後に真如寺に改められた（高知県2015）もの、宇和島伊達家の龍華山等覺寺は、初代秀宗が母の菩提を弔うため元和4年（1608）に建立したもので、金剛山大隆寺は伊達家の前に宇和島藩主であった富田信高が父知信の菩提を弔うために慶長十三年（1608）建立し、伊達家入部後は、5代村侯が自らの菩提寺に定めたものである。いずれも、開山や再興に深く藩主家が関与しており、藩主家の意向が受け入れやすい環境にあったと考えられる。

## 大名墓とは

治水事業や流通施設の整備等の社会インフラ事業とは異なり、お金をかけてもそれによって、藩の経済や領民の福祉にはほとんど効果は得られない、藩主が、「家」の家格、自らの権威を表現する場所で、経済的な許容範囲により、既述してきたように各藩で他家とは異なる特色のある墓制が志向された、藩主家にとっては、家臣団や領民、あるいは葬儀に参列した親戚他家に対して必要・不可欠な事業であった。代を重ねると、前例踏襲的な無味乾燥したものとなるが、高松藩松平頼恭による仏式葬儀への儒墓の導入、阿波藩蜂須賀重喜の儒墓の選択による葬制の変革、土佐藩6代豊隆による藩主墓域への子女墓の埋葬、宇和島藩5代村侯による旧制への復帰と夫婦墓の選択等、大なり小なり旧制とは異なる藩主による独自性も垣間見ることができる。大名墓を研究することにより、各家の仏教や神道、儒教等の葬儀における関与の程度から、思想や政治的位置等、その特色等が明らかになるものと期待される。また、藩主家のみならず、家臣団の墓制との比較も、今後の研究の大きな課題となるものと思われる。藩主家の墓は、近年その重要性が広く認識され、国史跡等として保護されてきているが、家臣墓については、そうした環境にはなく、今後も事態が改善する見込みはない。さらに、現在も子孫による祭祀が継続している場合にはその理解が必要となるし、子孫が絶え放置されている場合は、研究がなされる前に墓石が撤去され、消滅してしまう可能性が高い。喫緊の課題で思われる。

## 参考・引用文献

- 吾妻重二 2020 「日本における『家礼』式儒墓について—東アジア文化交渉の視点から（一）」『関西大学東西学術研究所紀要』第53輯，関西大学東西学術研究所
- 吾妻重二 2021 「日本における『家礼』式儒墓について—東アジア文化交渉の視点から（二）」『関西大学東西学術研究所紀要』第54輯，関西大学東西学術研究所
- 板橋稔 2012 「史跡樺崎寺跡発掘調査の成果」『第3回中世葬送墓制研究会資料 中世武士の墓と石塔』，中世葬送墓制研究会
- 胡光 2011 「大名が創った極楽浄土の世界—高松松平家と仏生山法然寺—」『遺跡学研究』8号，日本遺跡学会
- 岡本桂典 2015 「土佐藩主山内家墓所」『第7回大名墓研究会』，宇和島市教育委員会・大名墓研究会
- 清瀧寺徳源院京極家墓所木造霊屋解体修理実行委員会 1996 『滋賀県指定史跡清瀧寺徳源院京極家墓所木造霊屋（第22・23・24・25代）保存修理工事報告書』
- 児玉幸多 1987 「大名」『国史大辞典』，吉川弘文館

- 財団法人土佐山内家宝物資料館 2000『企画展示図録 将軍と大名－徳川幕府と山内家－』
- 坂詰秀一監修 2010『近世大名墓要覧』, ニューサイエンス社
- 田原葉 2011「土佐藩主山内家墓所」『第3回大名墓研究会 大名墓を読み解く』, 大名墓研究会・財団法人  
史跡鳥取藩主池田家墓所保存会
- 徳島市教育委員会 2005『史跡徳島藩主蜂須賀家墓所保存整備計画書』
- 中井均 2010「丸亀藩・多度津藩京極家墓所」『近世大名家墓所調査の現状と課題』, 立正大学考古学会・立  
正大学考古学研究室・石造文化財調査研究所
- 西澤昌平 2015「宇和島藩主伊達家墓所」『第7回大名墓研究会』, 宇和島市教育委員会・大名墓研究会
- 乗岡実 2018「中四国の大名墓の展開」『第10回大名墓研究会～近世大名墓研究の到達点～』, 大名墓研究  
会・就実大学吉備文化研究所
- 尾藤正英 1986「儒教」『国史大辞典』第7巻, 吉川弘文館
- 藤井直正 1989「近世公家墓所の一例－摂関家鷹司家の墓所－」『大手前女子大学論集』第23号, 大手前女  
子大学
- 古野徳久 2015「高松藩主松平家墓所の調査について」『第7回大名墓研究会』, 宇和島市教育委員会・大名  
墓研究会
- 古野徳久・御厨義道・加藤寛子 2016「東京都谷中霊園高松松平家墓所調査報告」『ミュージアム調査研究報  
告』, 香川県立ミュージアム
- 松井和明 2012「南関東と静岡の中世石塔と武士の墓所」『第3回中世葬送墓制研究会資料 中世武士の墓と  
石塔』, 中世葬送墓制研究会
- 松田朝由 2015「讃岐国生駒家墓所」『第7回大名墓研究会』, 宇和島市教育委員会・大名墓研究会
- 松原典明 2015「近世四国大名葬制の覚書」『第7回大名墓研究会』, 宇和島市教育委員会・大名墓研究会
- 松原典明 2018「土佐南学の墳墓様式から神道墓所様式の成立について」『近世大名葬制の基礎的研究』, 雄  
山閣
- 御厨義道 2013「高松藩初代松平頼重と法然寺」『徳島歴史講座「四国の藩と宗教」』, 徳島市立徳島城博物館
- 溝渕利博 2014「讃岐高松藩における「死の政治学」と幕藩制社会秩序の維持強化」『研究紀要』60・61, 高  
松大学
- 三宅良明 2011「徳島藩主蜂須賀家墓所の調査と整備」『第3回大名墓研究会 大名墓を読み解く』, 宇和島  
市教育委員会・大名墓研究会